問題児たちと奏者が異世界から来るそうですよ？

クラウ・ソラス

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
つまらなかった。
何も変わらない世界が、ぜんぜん面白くない人生が。
面白さを求めた少年は空から降ってきた手紙を開いた。

注：作者に文才はありませんのであしからず。

目　次

いきなりの召喚 ―――――――――― 1
似非紳士に喧嘩をふっかけるそうですよ？ ―――――――――― 6

いきなりの召喚

「はぁ、何か面白いことないかなぁ……」
夜空を見上げながら一人の少年が呟く。
何も変わらない日々を、何も起こらないことに不満を感じながら生きてきて。
分かってはいた。
何か大きな事件に巻き込まれたりすることなんか普通はないって事ぐらい。
でも、せっかく面白い異能（ちから）があるんだから全力で使ってみたかった。
自分がどんなことをどこまでできるのか知りたかった。
「……ん？」
ヒュウ、と。風が吹いた。横薙（よこな）ぎの風、それとともに一枚の封書がヒラヒラと手元に落ちてきた。
「……え、なんで？」
封書が空から降ってくるということに少々驚きつつ手に取ってみる。
封書には達筆でこう書かれていた。『高島和之殿へ』と。
「空から俺宛に手紙？まぁいいや」
手紙の封を切り、文章を読む。
『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。その才能（ギフト）を試すことを望むのならば、己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、我らの〝箱庭〟に来られたし』
◇
「うわっ」
急に視界が開けた。
見えるのは、見たこともない風景。
地平線が見え、その先には世界の果てとも思える断崖絶壁。
さらに、下には縮尺を見間違えるほどに巨大な天幕に覆われた未知の都市。

て、下？
下に都市ってまさかおい……。
下に都市が見えて、なおかつその先が見える高さに放り出される＝なすすべなく落下。
あっ、これ駄目だわ……。
なんか奇跡みたいなのおきてくんないと確実に死ぬ……。
というかとりあえず言わしてくれ。
「ど……何処だよここ!?」
そして上空４０００ｍから落下した四人と一匹は湖に落ちた。
◆
はぁ、まったく酷いことするなぁ。音からして、俺の他に三人かな。というか落下地点が湖だったからって全員濡れた以外に被害がないっておかしいだろ。結構な高さから落ちたはずなんだけど。
「し、信じられないわ！まさか問答無用で引き摺りこんだ挙げ句、空に放り出すなんて！」
「右に同じだクソッタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」
えっ、いやそれおかしいよね。石の中だと動けないよね。
「……。いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう？」
だよね。そうだよね。
「俺は問題ない」
「そう。身勝手ね」
いや、問題ないっておかしくね？てか、それで納得するんかい……。
二人の男女が互いに鼻を鳴らし、服の端を絞り始める。
あ、忘れてた。俺も服絞らなきゃ。
「此処……どこだだろう？」
「さぁな。まぁ、世界の果てっぽいものが見えたし、どこぞの大亀の背中じゃねぇか？」
と、さっきもう一人の少女と言い争っていた男が応えた。

というか、あの金髪は地毛なのだろうか？気になるんだが。
そんなことを思ってるとジロリ、と睨まれた。
が、その視線はスルーする。
「まず間違いないだろうが、一応確認しとくぞ。もしかしてお前達にも変な手紙が？」
「そうだけど、まずは〝オマエ〟って呼び方を訂正して。――私は久遠飛鳥よ。以後は気を付けて。それで、そこの猫を抱きかかえている貴女は？」
「……　春日部耀。以下同文」
「そう。よろしく春日部さん。で、どこにでもいそうな黒髪の貴方は？」
自己紹だと……。なんて言えばいいんだろ？わかんないや。まぁ、適当でいいか。
「高島和之だ。面倒くさいから以下略」
「そう。よろしく高島君。最後に、野蛮で凶暴そうなそこの貴方は？」
「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快楽主義者と三拍子そろった駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様」
「そう取扱（とりあつかい）説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」
「ハハ、マジかよ。今度作っとくから覚悟しとけ、お嬢様」
心からケラケラと笑う逆廻十六夜。
傲慢そうに顔を背ける久遠飛鳥。
我関せず無関心を装う春日部耀。
面倒くさそうにあくびをする高島和之。
そんな彼らを物陰から見ていた黒ウサギは思う。
（うわぁ……　なんか問題児ばっかりみたいですねぇ……）
そう思った黒ウサギは陰鬱そうに重くため息を吐いた。

◆

少ししても誰も出てこない。

せめてここの説明をしてくれる人ぐらい出てきてほしいものだが。
そんなことを思っていると十六夜が苛立たしげに言った。
「で、呼び出されたはいいけどなんで誰もいねぇんだよ。この状況だと、招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねぇのか？」
「そうね。なんの説明もないままでは動きようがないもの」
「いやいや、お前らこの状況で落ち着きすぎじゃねぇ？」
「……。それは貴方もだと思う」
（全くです）
説明をする人はいるにはいるのだが、四人が落ち着き過ぎているので出るべきタイミングが計れないのだ。
（まぁ、悩んでいても仕方がないデス。これ以上不満が噴出する前にお腹をくくりますか）
四人が様々な罵詈雑言を浴びせている様を見ると怖気づきそうになるが、此処は我慢である。
しかし、黒ウサギがそんなことを覚悟していると、十六夜がふと、ため息交じりに呟いた。
「――仕方がねぇな。こうなったら、そこに隠れている奴にでも話を聞くか？」
黒ウサギはまるで心臓を掴まれたかのように跳び跳ねた。
「なんだ、貴方も気付いてたの？」
「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ？そっちの二人も気付いていたんだろ？」
「風が吹いているからねぇ」
「風上に立たれたら嫌でもわかる」
「……　へぇ？面白いなお前ら」
十六夜は軽薄そうに笑っているが目は笑ってない。四人は理不尽な召集を受けた腹いせも込めて、殺気を籠めた冷ややかな視線を黒ウサギに向けた。
「や、やだなぁ御四人様。そんな狼みたいな怖い顔で見られると黒ウサギは死んじゃいますよ？ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの

天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは一つ穏便にお話を聞いていただけたら嬉しいでございますヨ？」
「断る」
「却下」
「お断りします」
「死ねばいい」
「あっは、取りつくシマもないですね♪というか最後の方酷くありませんか!?」
バンザーイ、と降参のポーズをとる黒ウサギ。
なんか値踏みされてる気がするんだけど気のせいかなぁ？というか春日部に気付いてないのか？
「えい？」
「フギャ！」
春日部が力いっぱい引っ張った。
「ちょ、ちょっとお待ちを！触るまでなら黙って受け入れますが、まさか初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、どういう了見ですか!?」
「好奇心の為せる業」
「自由にも程があります」
「へぇこのウサ耳って本物なのか？」
「……。じゃあ私も」
十六夜が右から、飛鳥が左から掴んだ。
黒ウサギは俺の方を見て助けを求めてきたが
「まぁ、がんば」
その希望は儚く散りゆき、黒ウサギの絶叫が近隣に木霊した。

似非紳士に喧嘩をふっかけるそうですよ？

「――あ、あり得ない。あり得ないのですよ。まさか話を聞いてもらうために小一時間も消費してしまうとは。学級崩壊とはきっとこのような状況を言うに違いないのデス」

「いいからさっさと進めろ」

うわぁ、自分達で引き延ばしてたのにそれは酷い。

涙を瞳に浮かばせながらも、話を聞いてもらえる状況を作ったのに、さらに追い打ちをかけられる黒ウサギを少し不憫に思いながら岸辺に座り込み、彼女の話を聞く。

黒ウサギは気を取り直したのか、咳払いをして、話を始めた。

少々長かったが、要は

○ここに来た俺達は皆、普通の人間ではなく恩恵（特異な力）を持っている。

○『ギフトゲーム』とは、その恩恵を用いて競いあう為のゲーム。

○ここ箱庭の世界は、強大な力を持つ恩恵（ギフト）保持者がオモシロオカシク生活するために造られたステージ。

○異世界から来たギフト保持者は、箱庭で生活するにあたって、数多ある〝コミュニティ〟のどこかに必ず属さなければならない。

○ギフトゲームの主催者は修羅神仏が開催するものと、コミュニティが独自開催するものとがある。

○この世界は外界よりも、格段に面白い。

ということだった。

◆

「ジン坊っちゃーン！新しい方を連れてきましたよー！」

「お帰り、黒ウサギ。そちらの三人が？」

「はいな、こちらの御四人様が――」

こちらを振り返った黒ウサギが、十六夜がいないことに気付き、固

まる。
「……　え、あれ？もう一人いませんでしたっけ？ちょっと目つきが悪くて、かなり口が悪くて、全身から〝俺問題児！〟ってオーラを放っている殿方が」
「あぁ、十六夜のことか？あいつなら〝ちょっと世界の果てを見てくるぜ！〟って向こうに駆け出してったぞ？」
　と言って十六夜が行った方向を指差す。
　さした方向は、上空から見えた断崖絶壁。
　街道のど真ん中で呆然となる黒ウサギ。
「な、なんで止めてくれなかったんですか！」
「〝止めてくれるなよ〟と言われたもの」
「ならどうして黒ウサギに、教えてくれなかったのですか!?」
「〝黒ウサギには言うなよ〟と言われたから」
「嘘です、絶対嘘です！実は面倒くさかっただけでしょう御三人さん！」
「「うん」」
「おう」
　黒ウサギが、前のめりに倒れた。
　まぁそうなるわな。やっと話を聞いてもらえて、移動もできたのに、気付いたら一人いない、なんてことになったんだから。
「た、大変です！〝世界の果て〟にはギフトゲームのため野放しにされている幻獣が」
「幻獣？」
「は、はい。ギフトを持った獣を指す言葉で、特に〝世界の果て〟付近には強力なギフトを持ったものがいます。出くわせば最後、とても人間では太刀打ち出来ません！」
「あら、それは残念。もう彼はゲームオーバー？」
「ゲーム参加前にゲームオーバー？……　斬新？」
「いや、ゲーム参加前の場合ってゲームオーバーって言うのか？」
「冗談を言っている場合じゃありません！」
　疑問に思ったこと言っただけなんだけどな。

「はぁ……ジン坊っちゃん。申し訳ありませんが、御三人様のご案内をお願いしてもよろしいでしょうか？」
「わかった。黒ウサギはどうする？」
「問題児を捕まえに参ります。事のついでに――〝箱庭の貴族〟と謳われるこのウサギを馬鹿にしたこと、骨の髄まで後悔させてやります」
いやいや、〝後悔させてやります〟って気付かなかった黒ウサギも悪いと思うんだけど。
「一刻程で戻ります！皆さんはゆっくりと箱庭ライフを後堪能ございませ！」
黒ウサギ速いなぁ、もう見えねぇし。
「……。箱庭の兎は随分速く飛べるのね。素直に感心するわ」
「ウサギ達は箱庭の創始者の眷属。力もそうですが、様々なギフトの他に特殊な権限も持ち合わせた貴種です。彼女なら余程の幻獣と出くわさない限り大丈夫だと思うのですが……」
そう、と飛鳥が空返事をする。
「黒ウサギも堪能くださいと言っていたし、御言葉に甘えて先に箱庭に入るとしましょう。エスコートは貴方がしてくださるのかしら？」
「え、あ、はい。コミュニティのリーダーをしているジン＝ラッセルです。齢十一になったばかりの若輩ですがよろしくお願いします。三人の名前は？」
「久遠飛鳥よ。そこで猫を抱えているのが」
「春日部曜」
「で、おれが高島和之だ」
にしても十一でリーダーね。それだけの実力があるのか、もしくは何か事情があるのか。
後者の気がするが、向こうが話すまではおいておこうか。
「さ、それじゃ箱庭に入りましょう。まずはそうね。軽い食事でもしながら話を聞かせてくれると嬉しいわ」

◆

そして、四人と一匹は通路を通って箱庭の幕下に出た。
ぱっと頭上から眩しい光が降り注いだ。
へぇ、太陽が見える。外からは、箱庭の中は見えなかったのに。
「箱庭を覆う天幕は内側に入ると不可視になるんですよ。そもそもあの巨大な天幕は太陽の光を直接受けられない種族のために設置されていますから」
「それはなんとも気になる話ね。この都市には吸血鬼でも住んでいるのかしら？」
「え、居ますけど」
「……。そう」
吸血鬼いるんだ。てか、そんなさらっと言える程度のことなんかい。
少し、歩いているとカフェテラスが幾つも見えてきた。
四人と一匹は、近くにあった〝六本傷〟の旗を掲げるカフェテラスに座る。
「いらっしゃっいませー。御注文はどうしますか？」
「えーと、紅茶を二つと緑茶を二つ。あと軽食にコレとコレと」
「はいはーい。ティーセット三つにネコマンマですね」
……ネコマンマ？何故にネコマンマ？誰が注文した？
「三毛猫の言葉、分かるの？」
「そりゃ分かりますよー私は猫族なんですから。お歳のわりに随分と綺麗な毛並みの旦那さんですし、ここはちょっぴりサービスさせてもらいますよー」
どうやらネコマンマを注文したのは、春日部の三毛猫だったようだ。
「……箱庭ってすごいね、三毛猫。私以外に三毛猫の言葉が分かる人がいたよ」
「ちょ、ちょっと待って。貴女もしかして猫と会話できるの？」
久遠が動揺し、ジンも興味深い事だったらしく質問を続けた。
俺？

俺はちょうど注文した物が届いたから食いながら聞いてた。

どれくらい時間がたったのか知らないが、気付いたらガルド＝ガスパーとかいう奴が来て、なんかジンと黒ウサギが隠していた事を喋った。

二人から話すことを待っていたんだけど、まぁいいか。

結局隠し事とは、ジン達のコミュニティは数年前にギフトゲームに負け、名と旗印、そして主力陣を失い、現在は存続しているのがやっとのことである、というだった。

それに、存続できているのも黒ウサギの働きがあってのものらしい。

というかガルドのタキシードがピチピチすぎて気持ち悪いのは俺だけだろうか？

「単刀直入に言います。もしよろしければ黒ウサギ共々、私のコミュニティに来ませんか？」

「な、何を言い出すんですガルド＝ガスパー!?」

いきなり、黒ウサギ共々俺達を勧誘してきたガルドに、ジンは怒りのあまりテーブルを叩いて抗議した。

にしても、ガルドのコミュニティに……　ねぇ。

確かここら辺一帯はこいつのとこが支配してるんだっけ？

コミュニティそのものを支配できるってことは相手は自分のコミュニティをかけたギフトゲームで負けたって事だ。

そのギフトゲームには両者が同意していただろう。

相手の同意無しに、ゲームに参加させられるのはジン達のコミュニティを襲った魔王と呼ばれる主催者権限を持つ奴等だけみたいだからな。

でも、コミュニティそのものをかけるなんてこと普通はしない筈だ。

そんなことをするってことは余程追い詰められていたのだろう。

誰に？

それは目の前のこいつだろう。
こいつのような奴が相手を追い詰める方法は数少ない。
つまり――――
と、考え事をしているうちに話が進んでいたみたいだ。
「……で、どうですかレディ達、ジェントルマン。返事はすぐにとは言いませんコミュニティに属さずとも――」
「うるさい」
「はい？どうかいたしましたかジェントルマン？」
「うるさいって言ったんだよ。このクズが」
「あの、御言葉ですがジェントルマン。私のどこがクズなのでしょうか」
「どういうこと？高島君」
「和之でいいよ久遠さん。春日部もな。」
「わかったわ」
「うん、わかった」
「で、こいつがクズだということについてだが。なぁ久遠、俺達が聞いたギフトゲームの内容はなんだったっけ？」
「えっと……。主催者（ホスト）とそれに挑戦するものが様々なチップをかけて行う。と言うものよ」
「そう、チップをかけるんだ。だが、コミュニティそのものをチップにかけることなんてそうあることなのかジン坊っちゃん？」
「やむを得ない状況なら稀に。しかし、これはコミュニティの存続を賭けたかなりレアケースです」
「だよな。コミュニティ同士の戦いを強制できるからこそ主催者権限を持つ者は魔王として恐れられているんだから。だが、それを持たないお前はいったいどうやってそんな大勝負を続けられたんだろうな。なぁ春日部、相手がコミュニティを賭けるってことはつまり？」
「賭けざるをえないところまで追い詰められているということ」
「ねぇ？貴方はどうやって相手を追い詰めたのかしら。『教えてくださる？』」
久遠のその一言で今まで黙っていたガルドが悲鳴を上げそうな顔

になり、口は意に反して言葉を紡ぎ始めた。
「お、追い詰める方法は様々だ。一番簡単なのは、相手のコミュニティの女子供をさらって脅迫すること。これに動じない相手は後回しにして、徐々に他のコミュニティを取り込んだ後、ゲームに乗らざるを得ない状況に圧迫していった」
「まぁ、そんなところでしょう。貴方のような小物らしい堅実な手です。けどそんな違法で吸収した組織が貴方の下で従順に働いてくれるのかしら？」
「各コミュニティから、数人ずつ子供を人質に取ってある」
久遠の雰囲気から嫌悪感が滲み出してきた。
子供を人質に……ねぇ。これはもう、駄目だな。
「……そう。ますます外道ね。それで、その子供達は――」
「やめとけ久遠。どうせもう子供達は死んでいる」
その場の空気が瞬時に凍りついた。
ジン、耀も、飛鳥も。皆が一瞬耳を疑い思考を停止させた。
ガルドでさえも目を見開いて固まっていた。
「……ジェントルマン、それはそちらの臆測の話で――」
『殺したの？』
ガルドが抵抗しようとするが、飛鳥の言葉に逆らえず、言葉を続けた。
「ああ、殺した」
「ということだが。どうする春日部、久遠」
「何をいまさら。ジン君のコミュニティに決まってるでしょ」
「私は、この世界に友達を作りにきただけだから」
「じゃあ私が友達1号に立候補していいかしら？」
「あ、じゃあ俺は2号で」
「……うん。二人は私の知ってる人達とちょっと違うから大丈夫かも」
「てことで改めて宜しく久遠、春日部」
「あら、飛鳥でいいわよ」
「……私も耀でいい」

「ということだ、ガルド＝ガスパー」
「もう帰っていいわよ」
飛鳥がパチン、と指を鳴らした。すると、それが合図だったのか、ガルドの拘束が解けた。
「ふ……　ふざけるなぁ、この小娘共がァァァァァ!!」
ガルドの体が雄叫びとともに激変した。
ピチピチのタキシードは弾け飛び、体毛が変色する。
お、少しは面白くなるか？
体を変化させたガルドは飛鳥に飛びかかろうとする。
「喧嘩はダメ」
しかし、あっけなく耀に取り押さえらる。
やっぱ、弱いなぁ。
「なぁ、ジン坊っちゃん箱庭の法でこいつを裁くとしたら時間はどのくらいかかる？」
「そうですね。箱庭に申請して、下調べを行ってからになるので、最低一ヶ月は必要かと」
「遅いな。それにもっとこいつに絶望を与えたいし。……　よし、俺達とギフトゲームをしよう。お前の〝フォレス・ガロ〟存続と〝ノーネーム〟の誇りと魂を賭けて、な」
さぁ、楽しい箱庭生活の始まりを告げるギフトゲームを始めよう。